

西山千さんを偲ぶ

鳥飼 玖美子

(日本通訳学会会長)

西山千さんは、同時通訳の大先輩として何度かお会いしている。いつも謙虚で優しい方であった。アポロ宇宙中継の同時通訳が話題になった際、電気工学専門の西山さんと違い理系に弱い私は四苦八苦し、と打ち明けたところ、「それは大変だったでしょう。でも、私が勉強したのは真空管の時代ですから大した違いはありませんよ」と笑って慰めて下さったことを記憶している。

2000年に日本通訳学会が発足した際、設立記念大会の記念講演は是非、西山さんをお願いしたい、という声があがり、連絡したところ、快く引き受けて下さった。既に歩行が若干不自由になられていたが、「首から上は大丈夫です」とおっしゃって、通訳理論研究を激励する講演をして下さった。その時以来、西山さんは本学会の名誉会員である。

当時、西山さんは日本翻訳家協会 (JST) 理事長をしておられ、入会して欲しいとのご依頼をいただき、参加するようになった。日本翻訳家協会 (JST) は国際翻訳家連盟 (FIT) の公式加盟団体として理事会に代表を送りこんでおり西山さんが長らく理事を務められていたが、海外旅行が体力的に負担になり、事務局長が代わりに理事となり後継者を探していた、というのは入会してから知った。後任として FIT 理事会に出席したところ、多くのメンバーから「ミスター・ニシヤマは元気か？」と聞かれ、西山さんの海外での存在を実感した。

私が西山さんと個人的に関わるようになったのは、戦後の日本外交を担った同時通訳パイオニア 5名のオーラル・ヒストリー研究を通してである。日本で最初に同時通訳を試みた人物として西山千さんは調査に欠かせない人物であった。研究の趣旨を詳細にわたって説明した依頼文を送ったところ、すぐに快諾のお返事があり、8月4日国際文化会館で、という指定であった。2003年のことである。

数時間にわたるインタビューの間、西山さんは朗らかに、楽しそうに、幼い頃の思い出から戦時中、戦後の話を語って下さった。米国育ちながら、家庭では日本語、学校では英語、という2言語の生活であったこと、不況と人種差別で就職がままならず日本に帰国したいきさつ、就職した通信省電気試験所で苦労しながら日本語の読み書きを学んだことなど、第二言語習得の観点からも興味深いエピソードばかりであった。

なかでも驚いたのは、西山さんの場合は、本人の意思や希望と関わりないところで、通訳者への道を歩んだ経緯である。日本政府が敗戦にあたり、進駐軍 (GHQ) に対し全面的協力

をするよう全公務員に指示した為、GHQ から通訳を要請された時に断れなかった、というのが西山さんにとって通訳者への出発点である。通訳はいやだ、と思ったこともあったようだが、ほぼ毎日のように続いた通訳業務の中で、西山さんは自己流で通訳術を編み出していく。特に、日本人が GHQ に対し何かを説明するのを英訳する際に、忙しい日本人が通訳している間ずっと待っていなければならないのが気の毒で、何とかしたいと、最初は早口で逐次通訳を試みた。しかし、早口過ぎて何を言っているか分からない、と言われ、試行錯誤の末にたどりついたのが同時通訳であった。まさに、日本での同時通訳パイオニアである。

終戦後しばらくして日本が独立すると、西山さんはGHQから米国大使館に移籍し、そのまま歴代駐日米国大使の通訳を務めることになる。なかでも日本育ちのライシャワー大使は日本語が堪能で、聴衆の面前で通訳の日本語を訂正するなど厳しかったが、西山さんは全く苦にするどころか、「まるきりもう、かけ合い漫才だよ」と可笑しそうに笑い、「訳の訂正というよりは、理解力、つまり情報のとらえかたの訂正」なのだから気にすることはなし、かえって安心だ、と感謝するのであった。ほぼ毎回のように西山の訳を訂正したライシャワー大使は、実は日記では、「西山はまさにかげがえのない素晴らしい通訳」(エドウィン・O・ライシャワー(2003)『ライシャワー大使日録』講談社学術文庫、p.70)と絶賛している。

電気工学が専門の西山さんが最も関心を持って取り組んだのは、アポロ宇宙中継の同時通訳である。エンジニアとしてロケットや宇宙船の機能に非常に興味があったという。文系が多い通訳者の中で、西山さんは例外的にアポロ宇宙中継を楽しんだといえよう。通訳者の役割観には個人差があるが、西山さんは最も強く「透明性」を主張した。「通訳者は透明人間」とまで言い切った。しかし皮肉にも、その西山さんは1969年、アポロ宇宙中継の同時通訳がNHKテレビを通して全国に流れ、一躍、名前と顔が知られる存在となる。そのことについては落ち着いたものを感じていたようだが、そのお陰で或る日、見知らぬ年配の女性から話しかけられることになる。以下、西山さん自身の語りを引用する。

「失礼ですけれども、あなた様ですか、あのアポロの通訳をしておられましたのは」。だから私は「はい。私、実はNHKでやりました」と言ったら、私にふかーくお辞儀をされてね。「どうもありがとうございました。まさか私がまだ生きてる間に、人間が月を歩くとは夢にも思わなかったけれども、あなた様のお陰で、現実にそれがあつたということがわかりましたので、本当にありがとうございました」といって、僕にお礼を言ってくださつたんですよ。

あまりにも意外であつたので、私は言葉が出なかつたんですよ。「ああ…」といつて私はお辞儀するだけでね。ものも言えないぐらい、どんと私にね、何ていうのかな、もう感動したんですよ。その瞬間だけ、「ああ、通訳者というのもの、ときどきは冥利のあるときがあるんだな」と。それはほとんど初めてだつたですよ。

(鳥飼玖美子『通訳者と戦後日米関係』みすず書房2007、p.257)

運命のいたずらで通訳者になったエンジニアは、自分の専門に最も近いアポロ宇宙中継の同時通訳で世に知られるようになり、その結果、初めて通訳職の冥利を感じたことになる。

通訳についての西山さんの個人的な思いとは別に、日本における通訳職に対する社会的認知を高めたことへの西山さんの貢献は大きい。アポロ宇宙中継だけでなく、1962年にロバート・ケネディ司法長官が早稲田大学で行った講演はテレビで中継され、何百万という人たちが西山さんの通訳を聞いている。通訳についての著書を何冊も出版して一般の理解を深めることにも西山さんは努力を傾注した。「通訳をする人間を <通訳> と呼ぶのは、良くないですよ。<通訳者>と呼ぶよう訴えていきましょう」と何年も前に言われて以来、私も<通訳者>という呼称にこだわるようになった。穏やかな紳士だが、信念は強く持っている方であった。

通訳者の役割についての研究をまとめることを非常に喜んで下さっていたので、書き上げた英語論文は今年5月中旬にお送りし、夏休みに入ったら日本語版を持ってお訪ねしようと楽しみにしていた。8月3日刊行予定の1ヶ月前に亡くなられたことは残念でならない。昨年2月、バレンタインのチョコレートをおみやげに訪問した際、「チョコレートは大好きで、毎晩ひとつずつ食べるんです」と喜んで下さった笑顔が忘れられない。もう一度、チョコレートを持って会いにうかがいたかった。今、私は、孝行しないうちに親を亡くした子供のような気持ちでいる。しかし、おそらく西山さんは、天国でこんな風に言っているのではないか。

「いいんですよ。それより、通訳学会の皆さん、頑張ってください。私は自己流の通訳でしたが、理論をふまえて訓練することは大切です。日本の通訳者もそのようになるよう、皆さんのご活躍を期待しています」。晩年の西山さんのお話を伺うことができた幸運な一人として、そう言って下さる西山さんの声が聞こえるような気がしてならない。 合掌。

